大学生の友人関係様式と関係形成・関係維持の関連Ⅱ

—友人と付き合う上での心がけに着目して—

○満野史子・今城周造

(昭和女子大学大学院生活機構研究科)

キーワード：大学生・友人関係・心がけ

The relationship between university student's friendship style and the formation and maintenance of relations:

Focusing on care to friendship behavior.

Fumiko MITSUNO, Shuzo IMAJO

(Graduate School of Human Life Sciences, Showa Women's University)

Key Words: university student, friendship, care to friendship behavior

目 的

友人と付き合う上で心がけていることを、友人との関係を形成する時と、関係を維持する時とで区別して尋ねることで、個人が抱える対人関係上の難しさと、その解決行動を明確化することを目的とした。本研究では、満野・今城(2012)による大学生の対人様式を全体的に捉えた3クラスタ(遠慮しない関係群・関係希薄群・気遣う関係群)を用いて差の検討を行う。また、心がけた内容がストレス反応と対人満足度に与える影響についても検討した。

方 法

調査協力者 都内の大学生 234 名(男性 92 名、女性 142 名、平均年齢 19.48 歳)。2011 年 6 月下旬に授業時間内に配布、集団実施後、回収した。

調査内容 (1)フェイスシート(学年、学科、性別)。(2)友人と付き合う上で心がけている内容尺度：友人との関係を形成する時、または維持する時に、どのようなことを心がけているのか自由記述で尋ね、その回答を分類してまとめた 30 項目を用いた。7 件法。(3)大学生用心理的ストレス反応尺度(尾関ら,1994)：35 項目 4 件法。(4)人生満足度尺度(Diener et al., 1985)：6 項目 7 件法。(5)対人満足度：1 項目 7 件法。調査を実施する際、(2)については「友人と付き合い始めた頃／友人と関係を続けていく上で」と教示文を変えた関係形成版と関係維持版を作成し、無作為配布した。それぞれ全 128 項目。本稿で報告しないものは省いた。

結 果

1. 心がけた尺度の因子分析

因子分析を行った結果(Table 1)、「Ⅰ相互的関わり ($\alpha=.77$)」、「Ⅱ消極的関わり ($\alpha=.72$)」、「Ⅲ積極的関わり ($\alpha=.68$)」の 3 因子が抽出された。

Table 1 心がけた内容尺度因子分析結果(主因子法、プロマックス回転)

	I	II	III
19 楽しい雰囲気をつくるようにする	.75	-.01	.02
26 場を壊すようなことはしないようにする	.69	.16	-.06
14 相手の相談にのるようにする	.60	-.09	.03
22 自分から挨拶をするようにする	.59	-.18	.18
28 少しずつ関係を深めるようにする	.56	.16	-.09
9 本心を出さないようにする	-.13	.73	.03
24 自分の領域には踏み込ませないようにする	-.06	.61	.01
30 相手の好きにさせ、かかわりすぎないようにする	.13	.57	-.03
27 相手に期待を持ちすぎないようにする	.24	.54	-.09
12 相手を否定も肯定もしない中立的態度でいるようにする	-.08	.44	.02
5 相手に合わせるようにする	.10	.40	.21
10 自分から誘って一緒にいるようにする	-.15	.18	.83
16 自分から連絡を取るようにする	.07	-.02	.66
7 自分から積極的に話しかけるようにする	.21	-.15	.47
因子間相関	I	0.25	0.28
	II		.04

2. 関係形成期と関係維持期の比較

心がけた内容尺度について、時期×3 クラスタの 2 要因の分散分析を行った。その結果、どの下位尺度でも交互作用はみられなかった。「相互的関わり」で $F(2,228)=7.39, p<.01$ 、「消極的関わり」で $F(2,228)=20.19, p<.001$ 、「積極的関わり」で $F(2,228)=5.79, p<.01$ とクラスタ間に有意な差がみとめられたため、Tukey の HSD 法による多重比較を行った。その結果、「相互的関わり」は気遣う関係群と遠慮しない関係群、「消極的関わり」は気遣う関係群、「積極的関わり」は遠慮しない関係群が有意に高い得点を示した。

3. 心がけた内容がストレスに与える影響

心がけた内容がストレスや対人満足度に与えている影響を重回帰分析(ステップワイズ法)で検討した(Table 2)。その結果、消極的関わりはストレス反応に、積極的関わりは対人関係満足度に弱いながらも有意な正の影響を与えていた。

Table 2 重回帰分析結果 (β)

	ストレス反応合計得点	対人関係満足度
相互的関わり	-	-
消極的関わり	0.24***	-
積極的関わり	-	0.26***
R^2	0.08***	0.07***

*** $p<.001$

考 察

どのクラスタも、心がけた内容は関係形成期も関係維持期も変化が見られなかった。気遣う関係群はストレスになりうる「消極的な関わり」を続けているため、ストレスが他群よりも高い可能性が考えられた。「心がけた内容」は「気遣い」の一側面だと考えられる。この「気遣い」はストレス要因にも対人満足度を高める要因にもなったため、今後その内容について精査することが課題であろう。

引用文献

Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.

満野史子・今城周造 (2012). 大学生の友人関係様式と関係形成・関係維持の関連Ⅰ——友人と付き合う上での困難さに着目して—— 日本健康心理学会第 25 回大会 (2012 年 9 月発表予定)

岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.

尾関友佳子・原口雅浩・津田彰 (1994). 大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析 健康心理学研究, **7**, 20-36.